
黒い翼と碧の目

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い翼と碧の目

【Nコード】

N10440

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

聖霊や聖獣、真獣そして魔獣が存在する世界に彼女は転生した。

人間だった彼女は病気で死亡し、その世界でいきることになった。何故転生したのかは分からない。けれど、意味なんていない。私は、新たな人生を楽しみたいから。

1話：私の誕生（前書き）

はじめまして。璃慧紗と申します。

読んでくださり、ありがとうございます。

1話：私の誕生

途切れる事の無い緑色の森。何の変哲もなく、それでいて美しい小川。

そんなものたちが存在する場所で私は目覚めた。

なんの装飾のない真っ白な場所。かすかに感じる消毒液の匂い。

彼女は朦朧とした意識の中で医師や看護師の声を聞いていた。

「大変、心拍が下がってきてる！先生、×××号室の患者さんの状態が急変しました！」

「こっちにあれもってきて！電気とおすのも一緒にっ」

ガラガラ・・・と台車を押す音も聞こえる。

「脈拍、心拍ともに危険です！！」

「点滴は××を、○○さん、これを――」

ああ、私はもうすぐ死ぬんだな、とどこか他人事のように思った。

生まれて18年。何の病気だったか忘れたが、12歳の頃に発症した。よく6年間も耐えたな、と思う。そうしているうち、頭の中に今までのことが思い出された。これが走馬灯というやつか、とただ甦る映像を見ていた。

そういえば、と家族に想いをよせる。父、母、弟と私の四人家族だったが、みんなやさしく、私にとって自慢できる家族だった。私が病気を発症してから母と弟は入院していた私をお見舞いにきてくれた。

父は仕事が忙しくあまり顔を見せなかったが、誕生日やクリスマスは絶対にプレゼントを買ってきてくれた。私にとって、なによりもかけがえのない家族だった。

と、その時。数人の走る足音が聞こえた。

「＊＊．．．！＊＊．．．＊＊．．．！！」

家族がきたのだ。母と弟は私に向かって、なにか言っている。残念ながら、私には聞き取ることが出来なかった。死ぬ瞬間まで何も出来ないのは悔しかった。だから――だから私は大切な家族に伝える。私の想いを。

「み．．．ん．．．な．．．わた、し．．．の．．．大．．．切．．．
な．．．家族．．．い、ま．．．ま．．．で．．．あり．．．が、と．．．
．．．わた．．．し．．．しあ、わせ．．．だ．．．っ．．．た、よ．．．
．．．」

ピ—————————。。

彼女が目を閉じた後、聞こえてきたのは機械音と啜り泣く声だけだった……。

病院で意識をなくしたあと、彼女が最初に目したのはグレーの毛だった。

「ニャ……。ニャニャ? (あれ……。ここはどこ?)」

「気付いたか、我が子。」

「ニャア? (え?)」

そして……。緑の目を持った猫だった。

1話：私の誕生（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。お願いします。

2話：私の現実（前書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

2話：私の現実

「我が子、私の愛しい子。名前はリアナティ、＜真碧＞にしよう。
さあ、真の碧しんのみどりを宿した娘よ、こちらにきなさい。」

どういゆうことですか。私は死んだはずでは・・・？ふと周りを
見渡すと、緑、緑、緑、と樹しか見えない。そして目の前に猫。
どうしようか、と私が悩んでいるうちに、しびれを切らしたのか、
猫が私を抱き寄せた。

「ふふ、まだ寝ているのかな？それでは、お披露目は後にしよう。
愛しい子よ、ゆっくりとおやすみなさい。」

そして、私の顔をなめた。かなりくすぐったかったが、そんなこ
とよりも私は現実には驚いていた。舐められたと感じたのは、人間の
肌ではなく、毛。そして私を舐めているのは猫。さらには我が子と
よばれている。つまり・・・

「（何で私は猫になっているんでしょうか・・・？）」

考えているうち、私は睡魔に襲われ、いつしか眠っていた。

私は、18歳で人間を終了し、猫になったようです。

2話：私の現実（後書き）

中途半端に終わってしまった感じがします・・・。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

3話：私のお披露目（前書き）

なかなか文章がまとまりませんでした。申し訳ありません。

今回も読んでくださり、ありがとうございます。

3話：私のお披露目

私の前には、銀色^{シルバー}、蒼、赤、黄色、橙色^{オレンジ}の毛皮が広がっていた。

私が猫として目覚めてから、ほぼ一ヶ月たった。

あの後、目が覚めてから私は私がいた巣から走って川へと行った。覗きこんだ水に映っていたのは、紛れも無い、猫の姿をした私だった。その時はかなり焦ったが、今となってはこれはこれでいいんじゃないかと思っている。

生前、病院に入院しっぱなしだった私は外に見える鳥や猫になりたいいつも思っていた。だから、この姿は気に入っていたりする。毛色が黒というのは黒髪黒目だった影響ではないかと内心嬉しかった。私があの世界で生きていた証拠があるようで。そしてまた、母猫が褒めてくれた碧色の目も。

後で聞いた話なのだが、私が転生した世界はジュパニアという大陸から出来ているらしい。これは私が生前住んでいた国と似た名前なのですぐに覚えた。そして、ここからが重要だと母猫が教えてくれた。

「ここには、聖霊、聖獣、真獣^{しんじゅう}、魔獣が存在する。聖霊と聖獣は人の魂が寄り集まって生まれた者達だ。この者達は守護を司る。そし

てその逆の者達が魔獣だ。人の負の感情から生まれる。しかし、ここには異端児イレギュラーも存在する。まあ、必ずしも魔獣＝悪と決め付けるな、ということだ。そして最後に真獣、私達のことだ。私達は全ての者達の味方であり、傍観者だ。私達はいわば存在の証明をする者なのだ。だから、わすれてはいけないよ。善と悪を決め付けてはいけないんだ。」

「それでは、皆にお披露目といこうか、我が子よ。さあ、行こうか。」

私がこの世界にきてから母となった彼女は（名前はソフィというらしい）、奇怪な行動をする私に笑いながら世話をしてくれた。私は彼女を母さまと呼んでいる。

母さまに従い、私は一緒に巣を出た。ふと振り返ってみると、私が母さまと住んでいる巣はかなり大きな樹の根元にあり、その大きさに少し驚いた。

少し歩くと、多少開けた場所に出た。

「ああ、来たか。ソフィ殿。そして・・・初めましてだね。＜真碧リアの姫＞。私はスカイドと言う。」

まず最初の見えたのは蒼色の猫。毛も目も、ともに深い蒼だ。そして赤、黄色、橙色オレンジの猫が現れた。

新たに出てきた三匹地の中で最初に口を開いたのは赤色の猫。

「お、ずいぶんとかわいいね。初めまして、姫様。私はルシアンと申します。」

それに続くように黄色と橙色の猫が言った。

「初めまして、姫君。私は見た目どおり、黄色を意味するリモネと申します。」

「私は太陽を意味するヨウキと申します。」

それらを聞いて私も礼儀として返す。

「初めまして、皆さん。リアナティと申します。あの、なぜ、姫なのですか？」

私の質問に対して、母さまが教えてくれた。

「それはね、私の愛しい子。私がこの者達の族長だからだよ。今は少ないが、ここの土地は真獣の私達、＜有翼猫^{ウイング・ザスト}＞族の住む場所なんだ。だから、族長の娘のお前は姫と呼ばれるんだよ。」

私はいままでそんな事を聞いたことが無かったので、母さまに問い詰めた。しかし、母さまは話を変えてしまった。

「まあ、そこは気にしないでくれ。ああ、そうだ。スカイド、お前の甥はどこにいる？姿が見えないようだが……。ん、来たようだな。」

母様が顔を向けた方を向くとそこには、
銀色シルバーの猫が立っていた。

3話：私のお披露目（後書き）

名称や名前は私が自分の好みで付けさせていただきました。

誤字・脱字がありましたら、お教えください。

4話：私と彼（前書き）

遅くなってもうしわけありません。

今現在、小説を書くことの難しさを実感しているところです。

今回から文章の書き方がかなり変わります。

4話：私と彼

「遅くなって申し訳ありません、長。」

「大丈夫だよ、シルデイス。お前にはこの周りの魔獣を追い払ってもらっている。まあ、今日でそれも終わりだけだね。・・・紹介しよう、この子は私の娘、名をリアナティという。」

そこで銀を纏った猫はリアナティに向き直った。

「初めまして、姫。私はシルデイスと申します。」

「・・・あ、はい。初めまして。」

「ふふ、緊張することはないよ、私の愛しい子。この者にはお前の騎士になってもらうのだからね。」

「おはようございます、姫。今日から、姫を御守りさせていただきます。」

次の日の朝、シルデイスは私と母の巣の前で待っていた。

「お、おはようございます、シルデイスさん。」

「おはよう、シルデイス。随分と早いね。」

「それは失礼しました、長。明日からはご起床時間に合わせて伺います。姫、私のことは気軽にシルデイスとお呼びください。」

母さまのからかいにまじめに答えると彼は（まだ名前ではべない）、今日の予定を聞いてきた。

「そうだね、我が子の行きたい所に行っておくれ。私は巢に居よう。」

「分かりました。それでは姫、どこか行きたいところがありますか？」

「え……。出掛けてもよろしいのですか、母さま？」

「ああ、好きなところへいっておいで。けれども、シルデイスと離れてはいけませんよ。」

母さまは笑みを浮かべ、それから巢へ戻ってしまった。

後に残ったのは私と彼だけ。暫し、無言の時間が続く。

先に口を開いたのはシルデイスだった。

「姫はあまり外に出たことはありませんか？」

「はい、あまり……。というか、殆ど……。母さまに危険だと言われたので……。」

「そうですか。それでは、ここから近い花畑はどうでしょうか。さまざまな種類の花があって、綺麗ですよ。」

花、という単語に私の耳が反応した。

「お花畑ですか！ぜひいきたいです！」

言うてから、いきなり声が変わったのを恥ずかしく思った。彼にあきれられていたらどうしようと思い、彼の方を見ると、彼は驚いたことに少し笑っていた。

「ええ、それでは行きましょう。わたしから離れないでください。」

そういつて歩きだしたので、私は慌てて彼の後をおった。

彼はリアナティの歩調に自然に合わせていた。

「わぁ……。すごいですね、シルデイスさん！」

「ここはく安らぎの園」といわれています。向こうにある崖まで続いています。花の種類は数千におよぶそうです。」

「そうなんですか・・・あ、この花はなんというのですか？」

「その花はダーヤといいます。その花自体が白く、さらに花が時間がたつと硬くなることから付けられました。花言葉は永遠です。こっちの赤い花はルル。花言葉は情熱です。」

それから私と彼はいろいろな話を話した。彼の知識は豊富で話に飽きることはなかった。

「すごいんですね、シルデイスさんは。」

「いいえ、たいしたことはありませんよ、姫。これはすべて長に教わったことです。」

「そうなんですか・・・。あ、あのですね、シルデイスさん。」

「なんですか、姫。」

「私のことは姫ではなく名前で呼んでほしいのですが、だめですか？」

「名前で、ですか。それは難しいかと。なにより、他のもの達が駄目だというでしょうから。」

彼は困ったようなつらそうな顔をしていた。それを見て私は自分のいったことが彼を困らせていることを知った。

「ですよね、我俣いってごめんなさい、シルデイスさん。それじゃあ、」

それじゃあ、帰りますか？と聞こうとして、彼に遮られた。

「ところで、姫。私はあなたの騎士です。姫が信頼の証として私のことを敬称なしで呼ぶならば、だれもわたしが姫のことを名前で呼んでも反対なさらないでしょう。」

「え・・・」

「お嫌ならばいいのですが・・・」

「い、嫌ではないです！ええっと、シルデイス・・・でいいですか・・・・？」

「はい。それで結構です、リアナティ様。」

彼が私の名前を呼んでくれた、ただそれだけで私は胸が熱くなった。

自然と頬が緩むのを感じた。

あれ、とそこで私は疑問に思った。

なんで私はシルデイスのことがこんなに気になっているのだろうか？

4話：私と彼（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

ヒロインのあらたな気持ち発覚です。

誤字・脱字がありましたら、お教えください。

5話：私と留守番（前書き）

こんなに遅くても読んでくださりありがとうございます。

5話：私と留守番

私がシルデイスと出掛けてから一週間近く経った。

「それじゃあ、いつてくるからね。私の愛しい子。家からではいけないよ。」

「はい、母さま。いつてらっしゃい。・・・シルデイスも。」

「いつて参ります、リアナティ様。今度来た時にはリアナティ様の行きたい所にまいりましょう。」

今日は母さまがシルデイスを連れて出掛けてしまう。どこに行くのかと聞くと、前に行ったひらけた所（広場と呼ばれている）と言っていた。何か話し合いかと思うけれども、内容までは教えてくれなかった。シルデイスに聞いても分からないとしか言わなかった。

二匹が出掛けてから数時間後。私は巢の中の階段を上り、私がぎりぎり通れるぐらいの覗き穴から外を見ていた。この覗き穴は少し前に偶然階段を見つけ、好奇心で上ってみたときに発見した。かなり遠くまで天気がいい日は特に見渡せるので私はよくここに来てい

た。今日は空は雲ひとつなく、風が少し強いくらいだ。この日に巣にいるのはある意味ラッキーだったかもしれないと思った。

ふと、視界の隅にあるものをとらえた。大木だ。遠いものではつきりとした大きさはわからなかったけれども、私が今いる巣となっている大木より大きく見えた。

「あの木、とても大きく見える……。ああ、留守番じゃなければ行きたかったな……。あ、そうだ、今度はあそこに行こう。……。シルデイスと一緒に。」

そこまで言って私は笑みを浮かべた。シルデイス。ほんのすこし前までは名前でなんて呼べなかった。それが今はシルデイスとリアナティ様だ。母さまはシルデイスが私を名前で呼んでいるのをはじめ見たときは驚いていたけれどもそのすぐ後に笑っていたから大丈夫だろう。

シルデイスにことを考えていると私の曇っていた心も晴れていくような気がした。

「早く帰ってこないかな……。」

それからしばらく、私は外を眺めていた。

5話：私と留守番（後書き）

母さまは「かあさま」と読んでください。

今は猫なので二匹と表しています。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

6話：長と娘（前書き）

今回は母猫視点です。

読んでくださりありがとうございます。

お気に入り登録もありがとうございます。

6話：長と娘

その身は闇よりも深い黒。この森とは違う色で引き付けられるような瞳。まだやわらかさを感じさせる爪は月のように輝いている。私の愛しき娘は魔獣・真獣・聖獣の始まりの者達の色を引き継いで生まれた。

この子は紛れも無くすべての生き物の味方となり世界の歴史を守っていけるだろう。私の真獣としての勘がそう告げていた。なぜなら、色を引き継ぐということはその生き物たちが存在したという＜証明者＜small>しょうめいしや＞になるのだから。

「我が子、私の愛しい子。名前はリアナティ、＜真碧＞にしよう。さあ、真の碧を宿した娘よ、こちらにきなさい。」

だから私は真獣の瞳をもった我が子に碧の名を授けた。もうひとつの意味は・・・この子が気付くまで待つとしよう。それに気付いたときは自分自身を認識した時だろうから。

目が覚めてからこの子は世界について興味を持っているようでもさまざまなことを聞いてきた。つつい私もこの子の年齢には見合わないことを教えてしまう。けれどもこの子は正しく理解しているよ

うで、たまに私でも答えづらい質問をしてくる。今からでもこの子の将来が楽しみだ。

時たま、いきなり川に走っていたり、巣の周りを歩いたり不思議に思う行動をしたこともあったが、それさえもいとおしく思えてしまう。

さあ、この子の将来のためにも手を打っておかねば。ああ、我が子は寝てしまった。生まれたばかりだから仕方あるまい。

私は寄り添ってきた我が子とともに眠りについた。

6話：長と娘（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

7話：騎士と長（前書き）

お知らせしたとおり、今日からまた始めたいと思います。

待ってくださった皆さん、ありがとうございます。

今回はシルデイス視点です。

7話：騎士と長

「シルデイス。話があるのだが・・・私と出掛けてくれないかい？」

今日はリアナティ様を迎えに行った際、長に呼び止められた。リアナティ様と出掛けるのは次回に持ち越しとなり、リアナティ様の悲しそうな顔を見ることとなってしまった。俺・・・もとい私もかなり残念に感じているが、長の命令だ、逆らえない。

「行って参ります、リアナティ様。今度来た時にはリアナティ様の行きたい所にまいりましょう。」

だから、ついそんなことを言った。といゆうより、口が勝手に動いていた、と言ったほうが正しいだろうか。私もこんな風に言うようになったんだな、と内心思っていた。

リアナティ様に何をしにくのかと聞かれ、分からないとしか答えられなかった。

不満そうに頬を膨らませた顔が可愛らしく思えた。

「シルデイス。私がお前に言いたいのは、リアナティについてだ。」

広場に来て、長がそう切り出した。

「リアナティ様について・・・ですか？」

「ああ。お前はあの子の色が何なのか分かってるね？」

リアナティ様の色・・・。

「聖獣の銀、真獣の碧、魔獣の黒ですね。」

「そうだよ。あの子は始まりの者達の色を引き継いだ。だから・・・
＜証明者＞となるだろう。シルデイス、お前にはあの子を騎士として・・・護ってあげておくれ。あの子は護られること嫌がるかもしれないが、支えてほしい。」

「長・・・。」

やはり長はすごい方だ。私は本当にそう思った。すべてに先を見ている。私がそれを拒否するはずがないのもわかっているのだろう。

「もちろんです、長。私は騎士としてリアナティ様をお護りします。」

そう言って私は長に向かって最上級の礼をした。猫の姿だと右前足を折り、頭を深く下げることしかできないが、伝わったと思う。

その証拠に長は真剣な表情から一転、楽しそうな表情に変わっていた。

「さすが、私が選んだ騎士だ。お前ならば後悔はないよ。どうやっていくかはお前の自由だ。私はお前が騎士ならば文句はない。」

なぜか今、騎士を強調された気がしたが・・・気のせいだろうか？

「さ、それじゃあ戻ろうか、シルデイス。姫が待ちくたびれている
だろうから。」

その時。　遠くで悲鳴が上がった。

7話：騎士と長（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

シルデイスは地は俺なのですが、本人が望んで「騎士らしく」私を使っています。

8話：私と声 (改) (前書き)

遅くなりました。申し訳ありません。

読んでくださり、ありがとうございます。

8話：私と声（改）

それはいきなり聞こえてきた。いや、感じた、と言ったほうが正しいのだろうか。

どこから響いている声。まるで・・・何かを求めているような。その声がある方に行ってみたい。なぜか私はこの時そう思った。

「どこなの・・・？誰・・・？」

私は自分でも気付かないうちに巢の入り口に来ていた。そこではつとずる。一人でいるときは巢から出てはいけないと言われていたんだっけ。

母さまとシルデイスはいない。母さまの言いつけは守らなくてはならない。それに、留守番をしているはずの私がいないと、帰ってきたとき二匹は心配するだろう。心配をかける訳にはいかない。

「そう、駄目だね・・・。」

私は巢の中に戻ろうとした。けれども、正体の分からない声は収まるどころか、だんだんと大きくなっている。しかも・・・声の中に悲しさが含まれているよう感じるのは気のせい？

私は、これ以上聞こえてくる声を見無視することが出来なかった。

それはまるであの時の私のように思えたから・・・

痛い・・・痛い・・・

「大丈夫ですか！？今、楽にしますからね、少し我慢してください！」

看護師の人の声が聞こえてくる・・・

あれは私が死ぬ二週間ほど前。今思えば、あの時から私の病気は末期だったのかもしれない。

病院で殆どの人が寝静まり、時計の針が三時を指したころ、私は心臓の辺りが急に痛みだした。震える手でナースコールを押し、暗闇の中で一人耐える。

すぐに看護師の人が数人来てくれた。私が寝ているベットの隣にある機械を確認して、点滴に別の薬を付け換えていた。

お母さん・・・来て、くれないかな・・・

一人ではなくなっても私は心の中で母を捜していた。こんな夜中に来ることはないだろう、と分かっていたいながら。

どれくらい時間が経っただろうか。私のベットのそばに誰かが座っているのにきづいた。

「もう大丈夫よ、お母さんがついてるからね。遅くなって、ごめんね・・・。」

私は知らず知らずの内に自分が安心していることに気付いた。

そして私が助けを求めていたんだと実感した。

私は森の中を駆けていた。まわりの木々が多すぎて、すでに自分がどこにいるのか分からない。けれども、巢に帰ろうとは思わない。

「待ってて・・・！」

私は声がする方に向かっていった。

空には暗雲が立ち込めていた・・・。

8話：私と声 (改) (後書き)

かなり変更しました。勝手に変えて申し訳ありません。10月25日
誤字・脱字がありましたらお知らせください。

9話：私と魔獣（前書き）

また遅くなり申し訳ありません。

読んでくださりありがとうございます。

9話：私と魔獣

どれくらい駆けつづけただろうか。もうだいぶ遠くまできたのではないだろうか。私は全身が疲労に包まれているのを感じていた。けれど、声はだんだんと近くなってきている。もう少しだろうと私が足に力を込めた時、声がぴたりと止んだ。さきほどまで聞こえていたはずなのに、嘘のようになんの音もしなくなった。どうしたのだろうか。まさか、声も出ない状態なのだろうか。私は逸る気持ちを抑え、草むらを抜けた。

「あれ？ここって……。」

草むらを抜けた先にはく広場＞に似た、それよりは少しせまく開けた場所。

一瞬、私はく広場＞に来てしまったのかと思ってしまった。そこで、ここは違うのだと認識する。何故なら、ここがく広場＞ならば、母さまとシルデイスがいるはずだから。そして違いをあらわにするのがもうひとつある。いや、正しくはいると言うべきか。

「黒い……霧……？」

私から元の世界の単位で言えば数メートルといった距離にそれはある。まわりは黒色の霧がたゆたい、その霧がふれるたび、まわり

9 話：私と魔獣（後書き）

中途半端で申し訳ありません。

続きはしっかりと構想を練ってからにします。私のような者がこれ以上の駄文を皆様によませるわけにはいきませんので。

どうか、もう少々お待ちください。

最後に、お気に入り登録20件以上ありがとうございます。週間ユニークアクセス数600以上、ありがとうございます。

10話：私と痛み（前書き）

前回の続きです。

読んでくださりありがとうございます。

10話：私と痛み

手足を振り回すだけでまわりを枯らし。一步踏み出すだけで地面が揺れる。

「アアアアアアアアア——！！！」

それは魔獣。負から生まれ、悪とされる獣。けもの

ただ存在しているだけでも害がある。その獣は私の目の前にいた。そして・・・助けを求めている。自分を助けてくれる存在に。

「アアアアアアア——！！！」

ギギツツ・・・

「きゃあっ！」

動かない私を無視して、魔獣は暴れ続ける。広がった霧で私の近

くにあった太い幹をもつ木が倒れた。

なんとかまき込まれずにすんだが、避けきれずに幹に右後ろ足が当たってしまった。これではもし次に霧の被害があった時、私は避けることはできないだろう。

被害を出さないためには魔獣を止めるしかない。・・・けれども私にはどうしようもなかった。なぜなら、魔獣の声を聞いたから。あの声で魔獣自身が助けを求めたから。そしてもうひとつは・・・

「あなたが魔獣だから。そして私が真獣だから。そして・・・私が私だから。私は真獣として魔獣の心が分かる。私だからあなたの願いが理解できる。」

魔獣がピタリを動きを止める。同時に黒い霧も動きを止めた。まるで、私の次のことばをまっているかのように。

「ごめんなさい、と心の中で謝る。あなたが望んでることを私は出れないから。」

「けれども・・・私はあなたが魔獣だとは認識出来ない！」

魔獣が崩れた。

「アア————アアアア————ッッ！！！」

今までとはくらべものにならないくらいの声をあげ、暴走したように暴れる。周りの木々が悲鳴をあげ、あたりには緑が存在しないと言い切れるほど、灰色が広がった。

そして、突風が吹き、木々が倒れ、草花が舞う。

「きゃあああああー！ー！ー！ー！！」

私の口から悲鳴がとびだす。この声でさらに状態がひどくなりはいないかと不安になりながら、私はとんでくる物を必死に避け、魔獣として存在できなかった者を見る。その状態を見て、自分の判断は間違っていたのではないかと思ってしまう。けれども、真獣としての私はあの者が魔獣ではないと告げていた。負の感情にとらわれることを嫌い、拒否し、助けを求める者は魔獣ではないと・・・魔獣として、あってはならないと。

と、その時、倒れていた木があまりにも強い風に動かされ、私がいる方向へ向かってきた。

動きつづけ、右後ろ足の痛みも限界に達していた私は意識が落ちていくのを感じた。

恐怖を感じるべきなのに、喜びを感じてしまったのは・・・

意識が落ちる直前に、銀色の毛並みを見たからだろう。

10話：私と痛み（後書き）

彼が到着するまでに時間を稼いで見ました。・・・無理やりですよ、自覚してます。

次回は彼の視点です。頑張って急ぎます。

誤字・脱字がありましたらしらせてくださると嬉しく思います。

11話：騎士と戦闘（前書き）

予告どおり、今回は彼の視点です。彼は「騎士」として表しています。

読んでくださりありがとうございます。

11話：騎士と戦闘

響いた悲鳴。それは私が護るべき方の声。

長と話してから、私はわき目も振らずに駆けた。その間も木々が倒れる音や風が渦巻いている音も聞こえる。・・・そして、負を持った獣の声も。

「アア——アア————！！」

途切れること無く響くその声は真獣の自分にその心までをも響かせる。

そして分かってしまった。そのそばにリアナティ様がいることも。長の娘だ、真獣の中でも力が強い。声も早くから聞こえるはずだろう。どこにも属せない自分と違って。そしてリアナティ様のことだ。声を聞いて思わず家を出てしまったのだろう。とても優しい方だから。ほおってなど、いられなかったのだろう。しかし、それはあまりにも危険な事だ。真獣としての力は間違った使い方をすれば、大変なことになる。

何故、リアナティ様を一人にしたのか。自分が深く考えずに行動していたのに嫌気が差す。けれども、そんなことを考える暇があるのなら、もっと速く駆けけると自分の心が急きたてる。私は心を抑え、ただ進んだ。

そこについたとき。それはリアナティ様に向かって木が飛んでくるときだった。

「リアナティ様!!」

急いで駆け寄ると、リアナティ様は笑ったように見えたが、すぐに体を倒し気を失ってしまった。体中に擦り傷ができ、右の後ろ足がひきづったようになっていた。おそらく、ひねったか何かをして、そうせざる終えなかったのだろう。

周りは木々が倒れ、風が渦巻く。そこに存在するものは魔獣だったもの。声を発し、助けを求めながらも魔獣ではないことを拒否する者。

あの状態ということはリアナティ様が力を使ったのだろう。真獣としての力を。それを知り、また彼女が自分とは違う場所にあるのを自覚して、寂しさを感じる。けれども、それよりも自分にある感情・・・それは怒りだった。こうなってしまった現実と、それをどうにも出来なかった自分自身に対しての。

気付けば私は魔獣だったものに向かって走り出していた。

「はあっ!!」

キイイ・・・ン

俺はそれに向かい右手に握った剣を振った。剣は今にも崩れそうな体で手を動かし、剣を受け止める。

「汝、その存在は偏らん。」

俺の放った真獣の力を発する言葉——<<真在唱>>。
それは、文字通り、真の存在すべき形を表す。

ガッ・・・ザシュ・・・

左足で左わき腹に向かいまわし蹴りをする。これは上手く決まった。負が減ってきているのが黒い霧が減ってきているのから分かった。続いて剣で胴を袈裟切りにする。両手で受けられたが、とめ切れなかったらしく、腕の殆どが崩れた。それでも再生しようとするので、続けて言葉を発する。

「聖なるもの。魔をもつもの。二つを持つもの、それが汝。」

再生しようとしていた腕がとまる。

「ゆえに我、汝の真の姿を欲し、これをくく真在唱・転在くくとする。」

その体が完全に崩れ、黒い霧は消えた。

「終わった・・・か。」

俺は剣をしまい、自分の姿をみた。

「人化したか・・・。」

今の俺の姿は猫ではなく人となっていた。真獣は人化もできるため戦うために無意識で人化したのだろう。人化したのは今回が初めてなのだが。

人化したとき、猫の時の姿に引きずられるらしいが、そのとおりだ。服の色が白銀だった。これではおそらく髪と目も同じような色だろう。

そういえば、いつのまにか俺になってしまっていた。私にもどさなければ、リアナティ様が驚くだろう。

私はリアナティ様を抱えると、長が待つ家へ向かい歩き出した。

11話：騎士と戦闘（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

12話：私と傷（前書き）

遅くなりました。申し訳ありません。

今回も無理やりの気がしますが・・・読んでくださると嬉しいです。

12話：私と傷

最初に目に飛び込んできたのは朝日。そして、緑色の目も。

「気付いたかい、我が子よ。」

居たのは母さま。私は心が安堵したのを感じた。それと同時に、あの銀色の毛並みを探している自分がいることにも気付いた。

「もう傷は治療したから大丈夫だよ。どこか痛みが残っているところはあるかい？」

母さまがそういつて私の顔を覗きこんだ。私は笑顔で大丈夫、と一言返した。

それを聞くと母さまは嬉しそうな顔をして、無理をするんじゃないよ、と私の顔を舐めた。

「さあ、もう少し、寝ていなさい。安静にしてなくてはならないよ。私は何か食べ物でも採ってこよう。」

そういうと母さまは出て行こうとしたので、つい私は聞きたかった事を聞いた。

「母さま、シルデイスは・・・？」

「ん？ああ、シルデイスは今は自分の巣にいるはずだよ。お前をこの家に運んでくれたのもシルデイスなんだ。今お前が横になっている所に新しい綿をもってきたのもシルデイスだ。」

「そっか・・・。」

それで私は確信した。あの時私を助けにきてくれたのはシルデイスだということ。

それを知って、心が温かくなっていることを。

母さまの姿が消え、私はゆっくりと瞼を閉じた。

「ん・・・」

どのくらい眠ったのだろうか。外から差し込む光は赤くなっていた。

「――――！――――？」

「――、――――？――。。」

外から話し声らしきものが聞こえてくる。巢の近くからだ。
私はつい、巢の入り口に近づいた。

「ですから――――デイスは――――まだ――――不足だと――――」

「――――それでも――――だ、時間は――――」

よく聞こえない。私は巢から少しだけ顔を出した。
巢の入り口の少し右側。そこに母さまと蒼い猫、スカイドがいた。
声をかけようとして、私は二匹の会話をはつきりと聞いてしまった。

「今回は間に合ったからよかったものの……次があるとは限らないのですよ、長。」

「それでも、なのだ。あの子は生きていく中で真獣としての力と向きあっていくことになる。その時にこそ、支えてやれる者がいなくてはならない。」

「姫が＜証明者＞であることも含めてですか。」

「ああ。あの子は本当に＜証明者＞だよ。そして、それだからこそ、騎士は彼にしかねない。」

「彼にしか・・・そうですか。長がそう言うのならそうなのでしょう。」

「理解してくれて助かるよ、＜蒼の賢者＞。」

「いいえ。私はまだ、このことは理解しか出来ていません。・・・長、もう一度確認させてください、シルデイスが拒否していてもですか。」

「では私ももう一度言おうか。時間はある。そうとしか今は言えないが。」

「・・・分かりました。では、」

そこまでだった。私は巢に入り、階段を駆け上がった。

拒否。シルデイスが私の騎士であることを拒否している――。。

私の頭のなかではその言葉がずっと巡っていた。

12話：私と傷（後書き）

中途半端です。時間が足りませんでした。

ご意見、ご感想お待ちしております。すでに迷走しそうなのでどうかお願いします。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

13話：私と真獣（前書き）

遅くなり申し訳ありません。

本当に危ないです。構想が・・・。

読んでくださりありがとうございます。

13話：私と真獣

「我が子よ、上にいるのかい？降りておいで、果物を持ってきたよ。」

しばらくして、母さまの声が聞こえてきた。

あまり時間が経っていなかったことに驚きつつも、私は言われるまま下におりた。巢の入り口に母さまが口に紅色の丸い実を銜えて立っていた。

「やっぱり、上にいたんだね。外に興味を持つことはいいことだよ。さあ、これをお食べ。アルの実だよ。」

「うん……。ありがとう、母さま。」

アルの実は林檎に似た味がした。噛むとシャリツと音がして、硬すぎずおいしかった。

これで、このわだかまりがなければもっとよかったんだろうけど。私の表情を見て気付いたのだろう、母さまが話しかけてきた。

「どうしたんだい、我が子。何か心配ごとでもあるのかい？」

「ううん……。なんでもありません、母さま。」

「そうかい？それならいいのだけれど。ああ、そういえばそれを探している時シルデイスに会ってね、お前の事を聞いてきたんだ。調子はどうだと聞かれたから大丈夫だといったけれど、明日にでも来ると言っていたよ。」

母さまの言葉を聞いてどきつとした。シルデイスが明日来る？・
・正直言っただけには、この状況でシルデイスとまともに会話できる自信が無かった。

「お前がよければ会っておやり。あの者は顔がずっと不安そうだった。話すべきこともあるだろう？」

その言葉で私は母さまが考えていることを認識した。

母さまがそう考えていてるのならば、私は、いくら怖くてもシルデイスと話さなくてはならないと思った。

そして、そのためには自分が知らないことを知らなくてはならないのだということを。

私は母さまと向き合って、問いを発した。

「母さま。私、聞きたい事があります。」

母さまにも伝わったのだろう、私の母としての顔とともに、真獣としての長の顔になった。

「真獣とは、何なのですか？そして、＜証明者＞とは何ですか？」

「スカイドとの会話を聞いていたのかい？いや、責めているわけではないよ。いつかは話さなければならぬ事だったのだから。」

母さまは静かに息を吐くと話を続けた。

「私たち真獣が存在を証明する者だということは話したね。存在とはつまり、その世界にいるための在り様なんだ。」

「在り様、ですか？」

「ああ。私たちがすることはその在り様を肯定、否定すること。生物だけでなく、物も。その者があるべき姿でいるためだ。あるべき姿とは世界の中で存在できる姿ということだ。あるべき姿でなければ、その者は存在できない。」

存在できない……。その言葉に私は悪寒を感じた。

私の頭にあの魔獣と出会ったときのことか思い出された。負の感情を持ち、それを拒否する姿。あれはあるべき姿ではないからこそ、あんなにもあの状態を受け入れなかったのだろう。

そして、私が放った言葉。あれは真獣としての言葉だ。結果、魔獣は魔獣だった者となった。

つまり真獣がすることとは――

「その者の姿を力で変える・・・ということですか？」

「そう。私たちはこの力をくく真在唱しんざいしょう>>と呼んでいる。これは私たちがその者が何者であるかを理解した上で、在り様を認識できるものに変えるのだ。善悪に関係なく、その者があるべき姿に。だから、お前がしたことは間違っていないよ。」

「母さま・・・。」

自分のしたことが間違っていないと言われたのは私の心を私自身に理解させてくれた。といってもほんの一部なので、理解までしかいたってはいない。

そこでそんな思考をしている自分がおかしく思えた。それも私が真獣だからだろう。認識している部分で、自分が真獣だということも認識できていた。そして、<証明者>だということも。

「ここからは真獣でも知っているものは少なく、それぞれの族の長とその本人である<証明者>しか知らないことだ。お前は<証明者

＞だ。だからこそ、話そうと思う。

＜証明者＞とは、存在を証明する者。重要なのは、真獣が在り様を変えるのにたいして、＜証明者＞はその者がいるのだと証明する。聖霊、聖獣、魔獣、中間の人間や動物。そして、命をもたぬ物。これらはすべて、いることを証明されているからこそ、存在するのだ。いると証明されていなければ、認識するに至る事も出来ない。」

「いることを証明する……。それが、私がすべきことですか。」

「お前は魔獣、真獣、聖獣の色を引き継いでいる。それだけでも、それらの存在を証明しているのだ。お前は＜証明者＞となるべく生まれてきたのだよ。」

その言葉を当たり前のように受け入れている自分がいて。

シルデイスが拒否している理由も分かるような気がした。

けれども、自分を少しでも認識した私はシルデイスと話すことを望んでいた。たとえば、どんなことを言われようとも。

心の痛みを感じたのは無視をした。

13話：私と真獣（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

14話：私と約束（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

突然ですが、勝手に新しく「黒き女神が秘めし森と民」という小説を開始させていただきました。

読んでくださるとうれしいです。

お気に入り登録30件以上ありがとうございます。これから頑張っていきたいと思います。

14話：私と約束

「おはようございます、リアナティ様。お加減はいかがでしょうか。」

次の日。シルデイスはいつもと同じ時間に現れた。それにほっとしている自分がいたけれども、彼からの言葉が私が期待しているものと違うと分かっているから、私はいつものように笑うことが出来なかった。

「はい、おはようございます、シルデイス。」

「少しお話したいこともあります。＜鈴鳴りの木＞へ行きませんか？」

「＜鈴鳴りの木＞ですか？」

「はい。リアナティ様をまだご案内していない場所です。どうですか？」

私はすぐにうなずいた。すでに傷もほとんどふさがり、動きたいと思っていたからだ。そして、こうすることで、シルデイスとの時間が増えるから。あとおんの少しだろうとも。

＜鈴鳴りの木＞へは他の場所に比べ、少し長く歩いた。といっても、＜安らぎの園＞ぐらいにしか行っていないので、はっきりとは分からないが。

＜鈴鳴りの木＞は、巢から見えた大きな木だということが分かった。見上げるほど大きく、幹は太かった。その根の近くに二匹ともに近づく。

リィー・・・ン・・・リィ・・・ン

大木からは鈴のような音が響いていた。

「綺麗な鈴の音がしますね・・・。」

「木の中を流れる水の音なのだそうです。幹に耳を当ててみてください。さい。」

「こうですか?・・・あ」

耳を当てると木の中からは鈴のなるような音がした。木の中の方が、音が大きいように感じた。

二匹でしばらくその音を聞いていた。その後、少し言葉をかわす。シルデイスが聞いてくるのは、殆ど私の怪我に関してだった。

「大丈夫です。シルデイスが助けに来てくれたおかげで、たいしたことはありませんでした。あ、言い忘れてましたね。ありがとうございました。」

私がそういうと、シルデイスは顔を俯かせた。

「・・・いいえ、リアナティ様。私は貴女を助けることが出来ませんでした。」

「え？でも、私を運んでくれたのはシルデイスなんですよね？」

「はい。リアナティ様をお運びしたのは私です。けれども、貴女さまにそんなに傷をつくるような状況を作ってしまったのも、私です。」

「いいえ、シルデイスは悪くありません。悪いのは私です。母さまの言いつけを破って外に出てしまったのですから。だから、気にしないでください。」

私がそういうと、シルデイスは意を決したような顔をして、口を開いた。

「それでも、です。・・・リアナティ様、私は貴女に言わなければならないことがあります。」

ああ、来てしまった・・・。私には、シルデイスがこのままシルデイスの言葉を待つことなど、できなかった。

「言わないでください、シルデイス。言いたいことは分かっています。・・・私が＜証明者＞だからでしょう？そんな役目をもつ私のような者の近くにいたくないのも分かっています。」

「リアナティ様・・・？」

シルデイスは驚いたように言葉を止めていた。否定しないのだから、私の思っていたとおりであったのだと、私は出来るだけ感情を表さないように言う。彼を私の勝手に縛り付けたくないから。

「私はシルデイスを騎士だからという理由で縛るつもりはありません。だから、シルデイスは自分の思うとおりに行動してください。」

言っている間も心がそれを言うなとばかりにうるさい。ずっと引き止めろと騒いでいる。

「ですから・・・シルデイス、あなたは私のそばにいらなくてもいいんです。」

「リアナティ様・・・そうではありません。違うのです。私は貴女の騎士であることがいやなわけではないんです。」

私の言葉を聴いたシルデイスはさつきよりも違うことを言おうとしているようだった。

それでも、彼が私のそばにいることが嫌なわけではないと知り、喜びを感じている自分がいた。

「じゃあ・・・？」

「・・・私が騎士をやめようとしたのは本当です。けれども、それは貴女に怪我を負わせてしまったからです。護るべきお方に傷を負わせるなど、私は騎士失格なのです・・・！」

その姿は必死に何かをこらえているかのようだった。

「貴女が思う以上に私は貴女の騎士でありたい。私は貴女のそばにいたいと思います。けれども・・・」

「いいえ。あなたは騎士です。」

気付けば、私はそう発していた。

「あなたがどう思おうと、あなたは騎士です。・・・ごめんなさい、私はさつきを言いました。私は他の誰よりも、シルデイスが私の騎士であってほしいんです。」

一度自分の気持ちを言ってしまうえば、私には止めることが出来なかった。

「私はあなたに騎士を辞めてほしくありません。護らなくてもいいんです、私は護られるのは好きではありません。・・・だから、シルデイス、私はあなたが＜証明者＞の騎士であることを受け入れてくれるならば、私はあなたに騎士となってほしいんです。」

「リアナティ様・・・私でよいのならば・・・」

シルデイスは私に向かって頭（こゝろ）を垂れた。

「私は貴女のそばにいますべき騎士となります。」

二人の約束。それは、真獣の姫と騎士の約束。

14話：私と約束（後書き）

誤解も解け、一件落着・・・といった感じですよ。

次回から、二人の関係に変化がありかもしれません。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

15話：私と決意（前書き）

読んでくださっている方々、ありがとうございます。テスト週間だったため、遅くなっていました。

今回はちょっとシリアスかと思っています。

15話：私と決意

「母さま。私は真獣として、＜証明者＞になります。それが、私の望みです。」

私はシルデイスと別れてからすぐ、母さまにそう言った。今の気持ちこそ、伝えるべきものだと思えたから。

「そうか、分かった。お前がそう言うのなら、そうなのだろう。では我が子……いや、リアナティ。私は真獣、＜有翼猫^{ウィングザスト}＞の長として、お前を＜証明者＞とする。」

母さまの反応はまるで私の言うことが分かっていたかのようだった。いつものまっすぐな目で私のことを見つめ、長としての言葉を紡いでゆく。ただ、その目には、娘^{メー}だけでなく、＜証明者＞として私が映っていた。

「先ず、お前に力の扱い方を教えなくては。時間はある。地道に覚えてゆけばいい。」

その声には娘としての私を心配する心が感じ取れて、私は少し嬉しくなった。それと同時にこれから真獣としての責任を負ってゆくのだと実感した。けれども、今の私には騎士がいる。彼がいてくれれば、私はなんでも乗り越えられそうな気がした。

私の頬の緩みに気付いたのだろうか、母さまが笑いを含んだ声音で話しかけてきた。

「その様子だと、シルデイスとは大丈夫だったようだね？ 安心したよ。＜証明者＞には騎士がいなくてはならないからね。」

こころなしか頬が赤くなったように感じた。と、そこで母さまの言葉に違和感を感じた。それを思うまま口に出す。

「あの、母さま？＜証明者＞に騎士がいなくてはならないって、どういうことですか？」

すると母さまは不思議そうな顔をして、知らなかったかのかい？と言葉を続けた。

「いつも＜証明者＞が存在する時代には、何かしらの出来事が起きる。ある王国では革命が起こり、またある国では外の者を受け付けなかったはずなのに、その外との貿易が活発になったり。その他にも、古代遺跡が発掘されたり、滅びたはずの聖獣の者が見つかったり。巻き込まれるのはそれらを証明するためだ、危険な場合もあるから、騎士がいなくては生きていけないのだよ。」

私はそのもつとも重要な事を知らずにシルデイスを騎士としてしまったことに気付いた。彼を自分が危険な場合に盾にするつもりなどなかった。

だから私はここで自分にある決意をする。
それは・・・

「母さま。私に、シルデイスと並んで役目をはたせるほどになりたいです。だから・・・真獣としての力だけでなく、それ以外のことも教えてください。」

自分の身を自分で護れるくらい強くなること。それが私のした決意。

私の声に真剣さを感じたのだろう。母さまは大きく頷いてくれた。

「もちろんだとも。ただし、人型がとれるようになってからでないと出来ないこともある。それでもいいね？」

「はい。頑張って人型をとれるようになります。」

「ああ、それでこそ私の子だ。」

空はいつも以上に晴れやかだった。それはこれからことを言
っているようで――

私は自分が新しく一歩を踏み出したことを感じた。

15話：私と決意（後書き）

シリアスではありませんね。いつもどおりって感じです。いつもどおりグダグダ・・・。

感想など頂けると嬉しいです。もう少しでアンケートを採るかもしれません。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

16話：私と賢者（前書き）

遅くなりました・・・。すみません・・・。

テスト週間が終わったのです！！だから書きます！

感想待ってます。文才のない作者のために、お願いします。

16話：私と賢者

「姫。貴女様は＜証明者＞となった。ですから私は、ウィングザスト＜有翼猫＞の＜賢者＞として、貴女様に真獣としての智を与えます。」

＜賢者＞スカイドに会うように言われたのは、私が母さまと話し合ってから数日後のことだった。

私はスカイドがいるという＜智の洞窟＞に向かった。＜智の洞窟＞は中も明るく、壁に埋まっている石が光っているようだった。スカイドさんはすでに洞窟の奥に座っていて、私が彼の前に来たとき言われた言葉がそれだった。

「智・・・ですか。」

「そうです。＜賢者＞の役割は＜証明者＞に智を与えること。他にも、貴女様に覚えていただくことはありますが、何を知るにしても智を持たなければなりません。ですから、今日から私が貴女様に智をお教えします。よろしいですね？」

「はい、もちろんです。よろしくおねがいします、スカイドさん。」

私の言葉にスカイドさんは頷いて、すぐそばにあった台座に座るよう言った。

「私のことはスカイド、もしくは＜賢者＞とおよび下さい。」

それに私は抵抗があった。＜証明者＞だからという理由で呼び捨てにするのはいいことなのだろうか、と。私が逡巡していると、スカイドさんが安心させるように言った。

「迷われなくていいのです。貴女様は＜証明者＞なのですから。ひとまず、呼び方は考えず、何故私が貴女様をこう呼んでいるのかから話したほうがよさそうですね。」

「真獣は存在を証明する者。私達は自分がいるだけで世界を証明しているのです。ですから、殆どの真獣は自分が存在を証明すべき者のそばにいます。あるものはどこかの国で、またあるものは草木少ない岩山に。そのほかにも、この大陸を流れる大河のそばにいる者もいます。＜長＞と＜賢者＞、＜騎士＞、＜極武＞、＜自然士＞、

＜天力＞はそれから外れますが・・・殆どの者が、そうして存在の証明をしています。」

私が話しに追いついているのを確認しながら、ゆっくりとつづける。

「そして――＜証明者＞は、いること自体を証明しているのです。その者がいるのだと認識している者がいなくて、その者は証明していることにはならないのです。・・・すこし、分かりづらかったかもしれませんね。」

スカイドさんは苦笑いのような表情を浮かべて、話を区切った。その間に私は頭の中で言われたことを整理する。

＜証明者＞は、存在をいるのだと証明する。その証明がなければ、真獣でも自身の存在だけで他の者を証明できない。

だいたいはあっているだろうとスカイドさんに確認すると、やや驚いた顔をされたが、笑顔で頷いてくれた。

「そのとおりです。貴女様がいなければ、＜有翼猫＞は存在できない一族です。私が、貴女様とこう接する理由がお分かりになりましたか？」

私は分かりました、でも、スカイドさん、と呼ばせてもらいますねという、スカイドさんは不思議そうな顔をした。

「ですから・・・私のことは呼び捨てでいいのですよ。貴女様は＜証明者＞様なのですから。」

「でも・・・私はまだ若い真獣です。皆さんに教えてもらっている者です。ですから、私は私の先生となる人を呼び捨てにはできません。」

スカイドさんは今度こそはっきりと驚きを表した。また違ったどこか嬉しそうな顔をして、では、そうおよびください、と短く言った。

「私が＜賢者＞として理解することを許されているのはこのくらいです。＜証明者＞にはもっと深いところまであるのでしょうか・・・それは、貴女様が御自分でしか分からないことです。―――なにか、質問はありますか？」

「ええっと・・・智、とは具体的に何を覚えればいいのでしょうか。」

「真獣とはなにかを今、お教えいたしました。もっと詳しくするのは後にして・・・そうですね、この世界の現状、歴史について、聖獣、聖霊、魔獣とはどうゆう者達なのか、人間、動物達について・・・などですね。最初は、＜＜真在唱＞＞をお使いになるでしょうか、聖獣、聖霊、魔獣について、お教えいたします。他にはなにか？」

初めからかなり重要なことだな、と思いつつ、さきほど聞いたことを聞いてみた。

「さっき言っていた、＜長＞や＜騎士＞とは、なんなのですか？」

「ああ、それは・・・詳しくいますと・・・」

スカイドさんからきいたことをまとめるところだった。

＜長＞・・・一族をまとめる資格を持った者。一族で力に優れ、一族の本拠地と

もいえる場所を管理している。＜長＞がいる限りそこが一族の帰る場所となる。

＜騎士＞・・・＜証明者＞付きの者。もっとも一族の中で力をうまく操り、剣技や体術に

優れている。＜証明者＞に絶対的な忠誠を持つ。その誓いは破られる事がない。

＜賢者＞・・・一族の中で智に優れている。智を管理し空のごとき目ですべてを見渡す。智を使い事柄を平定する。＜証明者＞に智を教える。

＜極武＞・・・一族の中で武に優れている。武を極め炎のごとき体を舞わせる。

武を使い敵を滅する。＜証明者＞に武を教える。

＜自然士＞・・・自然の存在だけを証明するためにいる者。自然の中で果実のごとく共にある。自然と協和する。＜証明者＞に自然とのあり方を教える。

＜天力＞・・・力の存在を証明する者。力に日の光のごとく可能性をさしだす。＜証明

者＞に力の可能性を教える。

「よろしいですか？」

スカイドさんの声ではっとした。反射ではい、と答える。どうやら、深く考え込んでしまったらしい。誰になにをおそわるのか分かっただけでいいか、と私は思考を中断した。

スカイドさんを見ると、すでに立ち上がっていて、洞窟の入り口に向かって歩き出していた。さっきの声は、理解したかの確認ではなく、終わりでいいのかという確認だったのだといまさらながら気付いた。

慌てて後を追う。明るかった外はすでに暗くなっていた。短時間のようには思えたが、思ったより長く話していたらしい。

「今日はありがとうございました。スカイドさん。」

「いいえ。では、明日からしばらくは私とく智の洞窟で学んでいただきます。また明日、日が空の真上に来た頃に此処に来てください。」

「はい、分かりました。それじゃあ、また明日。」

「では。長に怒られないように急いでくださいね。」

私はスカイドさんに軽く会釈してからその場を立ち去った。母さまに怒られないように早足で。

だから気付かなかった。

後ろで、スカイドさんがつぶやいていたことも。

「教えがいがありますね、あの子は……。私が勘違いしていたこともあったようだね……。」

草むらから、黒い影が私を見ていたことも。

16話：私と賢者（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

伏線張ってみました。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

17話：私と聖と魔（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

感想お待ちしております。

17話：私と聖と魔

「今日は、予定通り聖獣、聖霊、魔獣についてお教えします。あと、こんなものを用意しました。」

次の日、私は＜智の洞窟＞に来ていた。昨日と同じく、台座に座りスカイドさんの話を聞いている。

話を切り出したスカイドさんは薄い石版のような物を私に差し出した。20センチくらいの大きさでなにも彫られておらず、私が説明を求めると、スカイドさんは誇らしそうに喋った。

「スカイドさん、これは？」

「それは、代々の賢者が作ることが可能な智を残しておく為のものです。といっても、賢者が一族の者などに見せるときのためですが。この洞窟の石をから出来ているんです。それに手を当てて文字を思い浮かべると、文字が浮かんできます。書き留めておきたいことを書いておいてください。」

「すごいです、便利なものですね。」

「はい、＜証明者＞様である貴女様も作ることが出来ますよ。」

「そうなんですか・・・えっ？」

私は思わず素っ頓狂な声を上げた。＜証明者＞が＜賢者＞と同じことができるなんて、初めて知ったからだ。

「知りませんでしたか？＜証明者＞様は＜賢者＞である私のことも存在を証明していますから、もちろん＜賢者＞の力を使うことができるのです。」

「初めて知りました・・・。それは、＜極武＞や＜自然士＞の方の力ですか？」

「そのとおりです。ただし、例外は＜騎士＞ですね。」

「え？」

「＜証明者＞様はもちろん＜騎士＞の存在も証明されております。しかし＜騎士＞の力は、＜証明者＞様をお守りするための力です。で、＜証明者＞様はその力をお使いになれません。」

話を聞いているうちにどれだけ自分が無知だったのかを思い知った。シルデイスがあれほど私のことを気にしてくれたのは、彼の優しさだと浮かれていたのだろう。＜騎士＞としてのことは深く考えていなかった。浅はかな自分が嫌になる。

「やっぱり、駄目ですね、私は……。いままで自分がどれだけ力を考えていなかったのか思い知りました。」

気落ちした私にスカイドさんが変わらぬ声で話し続けた。

「そんなことを気にしてはいけません。今から知って行けばいいのですよ、貴女様は御自分が仰ったとおりまだお若いのですから。その歳でそれだけ認識と理解をしているだけでもすばらしいことです。」

言い方は固かったが、スカイドさんが私を慰めてくれているのがよく分かった。私もすっかりしないと、と自分に言い聞かせながら笑顔をうなづく。

「では、貴女様のためにも、その石版に文字を書き込んでおくといでしょう。消えろ、と念じれば消えますから、遠慮せずに書いてください。まだ石版の数もありますから。」

そのあとしばらくは石版の使い方に時間を費やした。

慣れてきたところで本題に入る。

「では、いいですか？ 大丈夫です、先ほどと同じようにお使いください。」

私は石版に手を当てるのをみて、スカイドさんは話し始めた。

「まず、聖獣についてです。この者達は存在が聖に属するものであり、人の魂が寄り集まって生まれます。もともといる動物にその動物に近かった存在の人の魂が宿り、聖獣となる場合もありますが、こちらはすくなくですね。」

次に聖霊についてです。この者達も聖獣と同様に聖に属し、生まれる方も同じです。

どちらも、守護を司ります。

最後に魔獣についてです。この者達は存在が魔に属し、人の負の感情から生まれます。詳しくいいますと、人の怒りや痛み、苦しみや悲しみに感化された動物が魔獣となります。そして、貴女様の見たとおり、正気ではいられなくなり、暴れるのです。・・・何か質問は？」

「あの、見た目にはどういった違いがあるのですか？」

「聖獣は全身が白であることが多いです。目や爪に濃淡があります。動物が聖獣になった者の場合、聖獣になる前の特徴を持っていたり、白の割合が多いだけの者もいます。」

聖霊は人型ですが、人の手のひらに乗るくらいだったり、通常の人の大きさと同じくらいだったりとさまざまです。

魔獣は黒をに染められます。動物の周りを黒い霧が覆い、だんだんと染み込んでいきます。」

私は聞きながら石版に書き続ける。そういえば、なにかもう一つなかったっけかな、とおもいつつ、確認のために声をだす。

「聖と魔で白と黒に分けられるんですね。」

「ええ。始まりの者たちの色ですから。」

「始まりの者達？」

「始まりの者達はそのとおり、その存在を持った最初の者達です。聖に属する者は月の白、真獣は碧、魔獣は闇の黒。それらの色に近いほど力は強く、＜証明者＞である貴女様はすべての色をもっています。」

「色……。＜証明者＞であれば、皆が私と同じ色なのですか？」

「私も詳しくは分かりません。＜長＞に聞いてみるとよいでしょう、＜長＞は＜証明者＞について、＜長＞でしか知らないことを知っています。」

私はまた頷いてから、石版にそれを書きとめた。石版は殆ど文字で埋まっていたが、まだ下の方にかけるだけの余裕があった。

そして、いまさらながら気付いた。今私が書いているのは、まぎれもない、日本語だ。

と、スカイドさんが石版を覗き込んできた。

「うまく書けていますね。これなら、これからもこれを使っていきますね。」

私はスカイドさんが当たり前のように日本語を読んでいることに驚いた。そのまま疑問を口にだすと、スカイドさんはいたって普通に答えた。

「そういえば、言っていなかったかもしれませんが。＜賢者＞は存在が認識されている言語なら読み書きが可能なのです。真獣ならば、なんとなくでも意味を理解することはできるのです。」

「そうなんですか！？・・・それも、初めて知りました・・・。」

「これは、説明していなかった私が悪いのです。どうか、お氣になさらないでください。」

「ですけど・・・」

そこで私は思い出した。自分のようなイレギュラーがいるのと同じように魔獣にも、異端児イレギュラーがいるのだということ。

「スカイドさん、もう一つきいてもいいですか？」

「どうぞ。しかし、これ以上は特になかったかと思いますが・・・」

「魔獣の異端児イレギュラーのことです。」

スカイドさんが息を呑むのが分かった。私がこのことを知っていることに驚いているのだろうか。私は黙ってスカイドさんの言葉を待った。

「異端児のことですか。もちろん、お教えいたします。・・・異端児とは通常の魔獣とは違い、正気を保っています。なぜならば、人間の負の感情を逆に取り込み、自分の中にある負の感情と同化させ

てしまうからです。」

「それが、異端児なんですね？」

「そうです。それらは、なにも無い時は落ち着いていて、会話もできます。しかし、一旦暴れだすと、＜＜真在唱＞＞をもってしても止めることは出来ません。止める方法は二つ。一つは、負の感情が抜けきるまで押さえこむか、殺すかです。」

「殺す・・・！？」

「それしか、方法がないのです。・・・残念なことに。」

スカイドさんは悲しそうな顔をしていた。それを見て、私は自分がスカイドさんにつらい話をしてもらっていたことに気付いた。

「ごめんなさい、スカイドさん。嫌なことを言わせて・・・。」

それにスカイドさんははじかれたように顔を上げた。

「ついいえ。大丈夫です、私は＜賢者＞です。私情は挟みません。・・・私こそ、駄目ですね、貴女様のよな若い方に心配されるなんて。」

「スカイドさん……。」

スカイドさんの声は元気がなかったが、さっきまでの悲しみが混じった感情は含まれていなかった。私が名前を呼ぶと、スカイドさんは外からのぞく光をみて、腰を上げた。

「では、今日は此処までといたしましょうか。その石版は持っていてください。そうですね……。」

スカイドさんが石版を持つと石版は丸い腕輪のようになった。それを私の前足に嵌めながらいう。

「これで、持ち運びは大丈夫ですね。これも、念じればできます。あと、表面に———」

腕輪のまわすと1という数字が書かれていた。

「このように、番号が振ってあります。今日は、最初なので1です。新しい石版をつなげると2、3と増えます。使い方は大丈夫ですか？」

私が頷くとスカイドさんは笑みを浮かべ、外に歩き出した。
歩きながら話し続ける。

「明日からなにをやるかは決まっていますが、このままいけば、特に問題はありませんので大丈夫でしょう。それでは、また明日、この洞窟で。よろしいですね？」

「はい、ではまた明日。」

洞窟から出て、私はスカイドさんに昨日と同じく言葉をかけると歩き出した。

と、何かを感じてまた振り向く。そこにいたのは変わらぬままのスカイドさんで、私は気のせいだったのだろうとまた歩きだした。

歩いているうちに視線を感じた気がしたことは忘れてしまった。

17話：私と聖と魔（後書き）

相変わらずグダグダです……。かなり焦ってます。いろいろと。

18話：騎士と言葉（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回はシルデイス視点です。

18話：騎士と言葉

魔獣との戦闘から二日後。私は長に許可を頂き、リアナティ様に会いに来た。

長は何も仰っていなかったが、リアナティ様は今回の事で心を痛めているだろう。

悪いのは自分だろう、シルデイス。守るべきリアナティ様に怪我を負わせてしまった。

頭の中を巡るのはいつも同じ言葉だ。

彼女はきつと、私のことをもう信頼してくださらないだろう。もう、ほんのりと赤くなった顔で「シルデイス」と呼んでくれる声がない。きこえなくなるのだ。

そう考えると私は恐怖を感じた。魔獣と会おうが微塵も感じなかったのに。

そして、この恐怖はただ怖いと思ったものに対しての恐怖ではない。それを信じられず、私の口から乾いた笑いが漏れた。

ははっ、信じられないな。私はリアナティ様のそばを離れたくないと思っている。

感じた恐怖は、今あるものをなくしたくないという思い。そして、なくすことで起こる痛み。

＜騎士＞失格の自分ではあまりにもおこがましい考え。私はこんな考えを無理やり振り払い、家から出てきたリアナティ様に声をかけた。

「おはようございます、リアナティ様。お加減はいかがでしょうか。」

自分で思ったよりも平淡な声がでた。そんな自分が嫌になりながらも、私はリアナティ様を＜鈴鳴りの木＞に誘った。

幸い、リアナティ様はすぐに頷いてくださったので、私はそのまま歩き出した。また、ここでも、拒否されなかったことに安堵する。少しでも時間を引き伸ばすことが出来るならば、と考えている自分がいることに笑えた。

＜鈴鳴りの木＞着いてから、少し会話をする。私の聞きたいこと

はほとんどリアナティ様の怪我のことだったが、リアナティ様は怒ることなく返事をくれた。

そして、そのまま終わりへの言葉を言われた。

「大丈夫です。シルデイスが助けに来てくれたおかげで、たいしたことはありませんでした。あ、言い忘れてましたね。ありがとうございました。」

違う。私は貴女様にお礼を言われることなどしていません。

「いいえ、リアナティ様。私はあなたを助けられませんでした。」

自分の口から思いがこぼれていくのを私はそのままにした。

リアナティ様は自分が悪いのだと言うが、悪いのは私だ。＜騎士＞としての役目を果たせなかったのだから。

「それでも、です。・・・リアナティ様。私は貴女に言わなければならないことがあります。」

私のその言葉を聞いたリアナティ様の顔が真剣味を増した。そして、何かを抑えるかのようにしながらも、その唇が動いた。

「言わないでください、シルデイス。言いたいことは分かっています。・・・私が＜証明者＞だいからでしょう？そんな役目を持つ私のような者の近くにいたくないのも分かります。」

その言葉はなによりも私の心を貫いた。違う、と心が叫んでいた。しかし、それよりも、私は衝撃が大きいあまり硬直して動けないで居た。

リアナティ様は表情を暗くしてゆき、言葉も感情が入っていなかった。

「ですから・・・シルデイス、貴方は私のそばにいらなくてもいいのです。」

「リアナティ様、そうではありません。違うのです。私は貴女の騎士であることが嫌なわけではないのです。」

気付けば、口からそうはっきりした声が出ていた。

言い訳と取られてもいいと、私は重ねた言葉は言葉を重ねた。

それに対して、リアナティ様は私の言葉をとめるようにして言葉をつむいだ。

「私は他の誰よりも、シルデイスが私の騎士であってほしいんです。」

その一言で私は自分ややるべきことを認識した。

私は迷わずリアナティ様に頭を垂れた。

「リアナティ様・・・私でよいのであれば・・・」

声がかすれているのが分かった。

「私は貴女を守る騎士となります。」

私はきつとわすれないだろう。この時のリアナティ様の笑顔を。

だから私は、いつか貴女に見合う者になるまで、認識した私の気

持ちをしまっておきます。

18話：騎士と言葉（後書き）

だんだんとグダグダになってしまいました・・・。

ちょっと強引な感じもありますが・・・。できれば、気にしないで読んでください。

19話：私と人化（前書き）

遅くなり申し訳ありません・・・。

ない頭を振り絞って書きました。・・・文才がほしいです。

読んでくださり、ありがとうございます。

19話：私と人化

「必要なのは、想像です。自分が真獣の姿でなく、人間だと思ってください。」

此処のところ、私は一日の殆どをスカイドさんと<智の洞窟>で過ごす日々が続いていた。自分の知らないことを学ぶのは楽しく、使用する石版はだんだんと増えていった。

そして今日は、いつもより早く洞窟に来るように言われ、私は太陽が空の真ん中に来る前に洞窟にたどり着いた。

そして、始まったのが、人化じんかのための講座だ。

「すでにお教えしたとおり、人間は集団で生きる者達です。真獣としてその中に私達はいなければなりません。さあ、想像してください。人は二本の足で歩き、二本の手を持ちます。肌の殆どが露出していて、私達のように毛が覆っているのではないのです。」

スカイドさんはとても丁寧に説明してくれた。人間について説明されても、私は前世があるから人間の姿は分かっていた。けれども、私はやり方がうまく掴めなかった。

「うう・・・出来ません・・・。」

「力は十分なのですが・・・焦ることはありません。動物から人間に姿を変えらるということはむずかしいことなのですから。正しくは動物が真獣の姿に近いのですが・・・ああ、これも説明しましたね。」

「そうですね、なにか、掛け^キ声を決めるといいかもしれません。」

「掛け^キ声ですか？」

「はい。自分が切り替わる合図を持つことで、やり方は楽になります。他の場合でも同じです。どうでしょうか？」

スカイドさんの提案は私にとって必要だと思った。さすが、＜賢者＞なんだな、と思いつつ、質問をする。

「掛け^キ声は、自分が好きな言葉でですか？」

「好きな言葉が一番望ましいと思います。ただ、その言葉が広まった場合、それが定着する可能性がありますので、注意してえらんでください。」

「分かりました。」

自分が考えた言葉が周りにも広がるなんて・・・と思っていたら、スカイドさんが、「貴女様は＜証明者＞様なので、広まる可能性はかなり高いですよ」と笑顔で言ってきた。私は自分の言葉に重みがあることを感じた。

というか、スカイドさん、重大なことを軽く言うタイプなんですね。

「今日も、ありがとうございました。帰ってからも、頑張って練習します。」

「そうしてください。ですが、無理はしないでくださいね。」

「はい、では。」

いつもと同じように空が暗くなってくると、私はスカイドさんと

別れて、家に向かって歩き出した。

「掛け声キかあ・・・どうしよう？形態変化メタモルフォーゼとか、変換チェンジ・・・とか？」

歩いている間も私は人化するための掛け声キを考えていた。前世に影響されてるなあ、と思いつつ、歩を進めて行く。

「どうしようかな・・・母さまに相談しようか。・・・ううん、でも自分のだから自分で考えたいし。」

そんなことを考えながら歩いていた所為だろう、私は誰かとぶつかってしまった。

「うわっ・・・」

「きゃっ・・・」

私の相手も地面に倒れてしまう。私より早く起き上がった相手が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？すみません、私の不注意で・・・あれ、リアナテイ様？」

「え？・・・シルデイス！」

相手はなんとシルデイスだった。私は慌てて起き上がった。

「シルデイス、どうしてここに？」

「私は、鍛錬の帰りです。リアナティ様こそ、どうしてですか？」

よく見ると、シルデイスの体はあちこち土が付いていた。

「私はく智の洞窟でスカイドさんと勉強です。今は帰りなんです
が・・・」

「そうなんですか。では、よろしければ、家までお送りいたしましょうか？」

その提案は嬉しいものだ。何回も繰り返しているため、道は覚えているのだが、暗い中は一人で心細かったのだ。

・・・このごろは、なにかを感じることが多いこともあって。

「いいんですか？でも、シルデイスは疲れてるんじゃない？」

「いいえ、大丈夫です。さあ、参りましょう。」

私とシルデイスは並んで歩き出した。シルデイスの銀の毛並みは暗い中でもよく目立つ。私はその光について見入ってしまった。それに気付いたシルデイスが振り向いた。

「？どうかしましたか、リアナティ様。」

「ついいえ、なんでもありません。」

私の声が高くなってしまった返答にも笑うことなく、シルデイスは私のそばによって、私の歩調に合わせてくれた。

会話もないまま、二匹で歩き続ける。

しばらくして、我が家が見えてきた。入り口でシルデイスと別れ

る。

「ありがとうございました、シルデイス。おかげで、怖くありません。」

「いいえ、私のすべきことをしたまでです。それでは、失礼いたします。」

「ええ、それじゃ。」

シルデイスの後姿が見えなくなるまで、私は外に出でいた。

19話：私と人化（後書き）

もうすぐアンケートを実施しようかと思っています。

誤字・脱字がありましたら、お教えください。

20話：私と動物（前書き）

アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。
更新が遅くなり申し訳ありません。

お気に入り登録40件以上ありがとうございます。

20話：私と動物

「えっと・・・ヒラキグサってこれかな？」

前足の爪を使いプツツと音を立てて草を摘み取った。

「まだ一回分。あと、四回分採らないと・・・。それから、イチリンソウも・・・。」

私が今いるのは、＜育ちの川辺＞と呼ばれる場所。太陽は空の真ん中を少し過ぎたあたり。今日は、スカイドさんから薬草などの採取を言われたのだ。

期限は明後日の昼まで。主な知識を教えたが、日常で使う知識も教えるのだ、とのこと。私はこつこつと集め続けていた。

「ふう・・・。このくらいかな？　というか、イチリンソウって毒草じゃ・・・。」

そこまで言って私は考えないことにした。ただでさえ今は憂鬱なのに、これ以上考えることを増やしたくなかった。

「人化できれば、もっと簡単になるのかなあ？」

人化を教えてもらってから数週間。私はいまだに人化できずにいた。

「ああ、駄目だ・・・考えないようにしよう。今は、薬草たぶんを集めないと。」

それからしばらく採取だけに意識を向けた。そうすることで、人化のことも、視線のことも忘れていた。

「1、2、3・・・これはある、あと、・・・7、8、あるね。
あとは・・・キュラメル？」

数時間後くらいには採取の殆どを終えていた。近くに置いてあった布の上には薬草が積み上げられていた。そして、いまだに集まっていないのが一つ。

「なんだろう、キュラメルって。甘いのかな・・・？違うよね、こ
こって毒草があるようなとこだし。特徴は、葉の模様が網みたいで

分厚いんだよね。あれ、まさか、ね・・・。」

私の脳内で茶色くて甘いお菓子が浮かんだがすぐに消した。食べれたら食べてみたいけれども。

空を見るとすでに暗かった。仕方ないから明日にしよう、そう思っ
て薬草の入った袋を背負い歩き出したその時だった。

夕日で赤くなった木々の間から、白っぽい色のウサギらしきもの
が出てきたのだ。

「キュウ」

「ウサギ？この森にウサギがいたんだ・・・。」

そのとき私の中に現れたのは好奇心。私はいままで、普通の動物
を見た事がなかったのだ。

立ち止まった私のもとにウサギは跳ねながら近づいてきた。

「はじめまして、白いウサギさん。どうしてここに？」

「キュキュウ、キュ、キュウ（真獣様、私、挨拶に）」

「あら、そうなの？ 様付けはいいよ、リアナティと呼んで？」

「キュウ！ キュキュウキュウ。（いけません！ 真獣様は偉いお方なのです。）」

「ではせめて名前で呼んでね。あ、貴女の名前は？」

「キュウウ。キュウキュウウ、キューキュウ。（分かりました。あたしの名前はロツティです、リアナティ様。）」

「うん、よろしくね、ロツティ。ごめん、私はそろそろ帰らないと。ごめんね、ロツティ。また明日。」

「キュウ！ キュウウ。（はい！ また会いましょう。）」

ロツティに見送られながら、私は帰路に着いた。

20話：私と動物（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

ヒラキグサとキュラメルは想像、イチリンソウは現実にある毒草です。

ウサギの鳴き方が分からないので、これも想像でやってみました。

21話：私と子守唄（前書き）

遅くなりました・・・。申し訳ありません。

相変わらず遅い更新ですが、読んでくださると嬉しいです。

21話：私と子守唄

「お帰り、リアナティ。葉草は見つかったかい？」

ロッティと別れて帰途に着いた私を出迎えたのはテーブル（切り株にちかい）に並べられた夕食と、母さまだった。

「ただいま、母さま。はい、だいたいのものは集められました。また明日も行きます。」

「そうかい。それならよかった。では、荷物はそこに置きなさい。夕食にしよう。」

母さまが指差した入り口の近くの一角に私は荷物を置いて、テーブルに近寄った。

テーブルに並んでいるのは、湯気の立つ魚と、数種類の木の実、そして果物の盛られた皿。

「この魚はカワナギという、今日獲ったばかりの魚だ。ちなみに海の魚で代表的なのは、ウミナギというんだ、知っていたかい？ 果物

はお前が好きなアルの実もあるよ。」

「おいしそうですね、母さま。いただきます。」

「ああ、好きなだけお食べ。」

私は最初にカワナギという魚に口をつけた。皮がパリッとしていて、香ばしかった。

どうも、この世界で私は魚が好きになったような気がした。けれど、それだけおいしいのだから問題はないだろう、と私は食べ続けた。私と同じ位の速さで母さまも食べていた。母さまも魚を一番多く食べているところを見ると、私と同じ物が好きなんだな、と分かって嬉しくなった。

そのあとも、木の実、果物ともに食べ終わった。

「「ごちそう様でした。」」

「おいしかったです、母さま。」

「それはよかった。明日は、魚の数を増やすとしよう。」

そして、冷たいお茶（森の香草を煎じたもの）を飲みながら、私は今日あったことを母さまに喋った。

「・・・なので、まだキュラメルはないんです。母さま、どうい

ものだから分かりますか？」

「ああ、キュラメルは見つかりづらいんだ。大きさも小さいからね。茂みの中にあったり、木のほんとうに根元近くにあったり。」

「そうですか……。あ、そういえば今日、白ウサギのロツティって子に会ったんです。」

「白ウサギ？ならば、その子に聞くといいだろう。そのあたりに住んでいる者の方が、詳しいだろうからね。」

「はい、そうします。」

私が頷くのを見てから、母さまは話を変えた。

「ところで、リアナティ。お前はその子と会話して名前を聞いたのかい？」

「え？あ、はい。そうですよ……？」

「そうか……。いや、悪いことではないんだよ。」

私は不安げな顔をしたからだろう。母さまが口早に言ってきた。

「お前も動物の声を聞き取れるくらい成長したのだと思ったからさ。」

私が返す言葉に困っていると、母さまは会話を切り上げてお茶のカップを空にした。

「さあ、明日もでかけるのだろうか？もうお休み。」

「はい……。」

「――愛しき子よ、夢を見ているの――さあ、癒しの眠りに誘いましょう――どうか、苦しみなく痛みもない――心休める時の波に身を委ねて、力湧き出る泉へ――」

聞こえてくるのは母さまが歌っている子守唄。生まれてから何度も聞いていた。自然と、私はその声に耳を傾ける。

「――澄み渡る空、強固なる大地――ああ、愛しき子よ、全てに包まれて安らぎを――」

21話：私と子守唄（後書き）

カワナギ&ウミナギは私の想像です。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

22話：私と彼女（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回から動物は『』になります。聞き取れないときは鳴き声が入ります。

22話：私と彼女

「いってらっしゃい、リアナティ。」

「いってきます、母さま。」

翌日。私は太陽が顔をだし、少したった頃に家を出た。

空は相変わらず晴れていて、風も強くなく、昨日と同じく出掛けるにはちょうどいい天気だった。

昨日と同じく＜育ちの川辺＞に向かう。視線は感じなかった。

『リアナティ様！おはようございます。』

＜育ちの川辺＞に行くと、昨日と同じ場所でロツティが待っていた。

「おはよう、ロッティ。今日も私は薬草集めなんだけど・・・。」

『大丈夫です、私は用事はありません、リアナティ様を手伝うためにきましたので』

「そうなの？それじゃ、一緒に集めてくれる？といっても、一種類だけなんだけど・・・」

『はい、もちろんです。』

それから数十分でキュラメルは見つかった。ロッティがこっちです、と言って連れて行った先が自分が来た道だと知り、ショックだったのは心にしまって置いた。

ついでに言うておくと、キュラメルは食用ではなく、緑色の大きな葉を持った薬草だった。

「ありがとう、ロッティ。おかげですぐに終わったよ。」

『いいえ、どういたしまして。もう集めるのはよいのですか？』

「うん、もういいよ。あ、それでね、なんかお礼したいんだけど・・・」

・
」

『そんな！お礼なんていいです。私が好きでやったことなので』

「そう？でも・・・そうだ、ロッティ、アルの実は好き？」

『え？あ、はい、好きですけど・・・。』

「そう？よかった！それじゃ、はいこれ、どうぞ。」

私は持ってきていたアルの実を袋から出した。朝食に出されたものを小腹が空いたら食べればいいかな、と思い持ってきていたのだ。私が出したアルも実をみて、ロッティは驚きながらも受け取った。

『ありがとうございます、リアナティ様。いただきますね・・・。』

ロッティはアルの実を一口かじり、顔をほころばせた。それを見て、私もつい笑ってしまう。

『？どうかしましたか、リアナティ様？』

「ううん、おいしそうに食べるなあ、と思って。」

『そうですか・・・私達は木に登れないので、果物を食べる機会が
少ないのです。なので、つい・・・』

「よかったら、また持ってこようか？」

『いいのですか？でも、リアナティ様に迷惑が・・・』

「大丈夫よ？あ、でもそうだよね・・・私達まだ、知り合いつてところだし・・・ねえ、ロツティ。私のこと、様なしで呼んで？」

『え？』

私の突然の問いに驚いたらしく、ロツティはアルの実を食べるのをとめた。ちょっと自信をなくしながら私は言葉を続ける。

「あのね、友達って言えば、きてもいいかな、と思って。」

『友達・・・リアナティ様とですか？』

「そう。駄目かな？」

『いえ・・・私は嬉しいですが・・・あのですね・・・』

「うん？」

『ええと・・・その、考えさせてもらえますか・・・？』

「うん、分かった。私は明日には昼ごろまでいるからね。今日は帰るしかないけど・・・。」

『はい・・・すみません、リアナティ様。』

「ううん。それじゃ、私はもういくね・・・。それじゃ。」

『・・・』

帰り際、ロツティが返事を返してくれないことを悲しく思いながらも、私は家に向かって歩き出した。ロツティが引き止めてくれないかな、と期待しながらも、その声が聞こえることなく、いつしか<育ちの川辺>から離れていた。

行きは楽しみで浮いていた心が帰りは重く感じた。そして、気になることもあった。

私が友達、と言ったときのロツティの表情。困っているようで、その中に恐怖が混じっているように思えた。

どうしようも出来なくて、私は結局、家が見えてくるまで考え続けていた。

22話：私と彼女（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

感想お待ちしております。

23話：私と一時間（じゅみょう）（前書き）

読んでくださりありがとうございます。
今年最後の投稿です。

23話：私と一時間（じゅみょう）

「おや？リアナティ様、どうなさいました？採集は終わったのですか？」

ロッティと別れてから私はそのまま家に帰る気になれず、＜智の洞窟＞に向かった。

中に入っていくと、スカイドさんがいつもと同じ場所に座っていた。

「採集は、終わりました。あの、スカイドさん。聞きたいことがあるのですが……。」

「なんででしょうか。私がリアナティ様にお教えしていないことはもうほとんどないはずですが？」

スカイドさんが不思議そうな顔をしながら聞いてきた。そのなかには不安も含まれていた。

「私、＜育ちの川辺＞でロッティっていう白ウサギの子と知り合っただんです。」

「白ウサギ・・・そうですか。その子となにかあったんですか？」

「いいえ、あったというか・・・私とは友達になれないみたいで・・・真獣と動物では友達になれないのですか？」

私の問いにスカイドさんは難しそうな顔をした。

「・・・リアナティ様。動物がどれほど生きるか知っていますか？」

「いいえ。」

「動物は短いものだと言われ、10年足らず。それに対して、真獣は寿命というものが存在しません。私達が死ぬのは、自らが証明するものがなくなったときか、証明するものを証明する必要がなくなったときです。」

あまりに生きる時間が違いすぎるのです、とスカイドさんは言っていました。私の胸にこみ上げるのは悲しみ。それでは、自分は彼女と出会ってはならなかったと言われているようです。

「そんな・・・。」

「これが現実なのです。しかし――」

そこでスカイドさんは言葉を切った。そこには躊躇いが見て取れて、私は自分から先を促した。

「真獣である貴女様がそういったものを気にしないのであれば。動物でも人間でも、友となることは可能です。」

それに、とスカイドさんは続けた。

「貴女様は、とても強い心をお持ちです。そして、周りには支えようとする者達がいいます。自分の後悔のない行動をなさってください。」

その言葉は私の心に染みていくようだった。私はその心のまま頷いた。

「ありがとうございます、スカイドさん。明日、ロットィに会おうと思います。」

「いいえ、決められたのは御自分ですよ、リアナティ様。どうか、

私と同じにならないように・・・」

え、と最後のころが聞き取れなくて聞き返すと、スカイドさんはあいまいに笑うだけだった。

スカイドさんに見送られて、私は洞窟を出た。

洞窟から出て、数歩歩いたところで私は気がついた。視線がないのだ。いつも感じていたようなものが存在しなかった。ロツティと会ってからいいことばかりだな、と思いつつ、私は晴れた心で歩き出した。

私の頭からはロツティが見せた表情に恐怖があつたことを忘れていた。それを向ける相手が誰かも分からないまま。

23話：私と一時間（じゅみょう）（後書き）

皆様、よいお年を！

24話：私と縛り（前書き）

読んでくださりありがとうございます。お待たせいたしました。

申し訳ありませんが、受験生のためしばらく更新を休止させていただきます。

次の更新は二月下旬になるかと思われます。

24話：私と縛り

「ロッティは・・・いないか。」

私はまたく育ちの川辺へに来ていた。すでにそこには誰の姿もなく、草木が揺れているだけだった。

仕方なく私は来た道に戻ろうとした。と、そこで、

「何これ・・・」

何か赤いものが地面にある。それは草むらの向こうにまで続いていた。

私はそれを伝って歩き出した。

「もしかして、これって血？」

血らしきものは止まらず、草むらを抜けても続いていた。ここを通った動物は怪我をしているのだろうか。もしかして、という思いが私の頭をよぎったが、あえて考えないことにした。

しばらくすると、血は洞穴らしきところで途切れていた。

「すみません、大丈夫ですか・・・？」

クマの洞穴だろうか。しかし中からは大きな気配はしなかった。
あるのはおそらく小動物と思われる気配だけ。

私が呼びかけても返答は無かった。私はそのまま洞穴の中に足を
踏み入れた。

「あの・・・誰かいませんか？」

洞穴の中は薄暗かった。再度私が呼びかけても、返答はない。そ
の代わりうめき声が聞こえてきた。

『うう・・・』

「あっ！誰かいるんですか？どうしました？」

『リアナティ様・・・』

「ロツティ・・・？」

奥から出てきたのは見覚えのある白ウサギ。しかし何か様子がおかしかった。

『ああ・・・苦しい・・・』

「どうしたの、ロツティ・・・？」

聞こえてくる声はいつもより低い声。手から血を垂らし、ふらふらとした足取りでこちらに寄ってきた。つい私は数歩下がってしまう。

「怪我を手当てしないと、きゃあっ!？」

ロツティがいきなり飛び掛ってきた。怪我をしているとは思えない動きだ。

私は追われるまま洞穴からでた。

「ロツティ、私だよ？」

『命令・・・捕獲・・・』

意思が感じられない言葉が続く。そのようすはまるで――

「操られてる・・・？」

そうでなければ説明がつかないだろう。彼女が自分の意思でこんなことをするはずがないと私は思っている。

そして私の言葉にロツティがぴくりと反応した。

『命令・・・捕獲・・・嫌・・・命令・・・捕獲・・・拒否、不可・・・』

「!!」

そこで私は認識した。ロツティは誰かに操られている、と。内容は私の捕獲。その命令は拒否することができない。

だから今の私に出来ることは。

「ロツティの、縛りを解く・・・!」

操られているのならそれをなくす。話をするのはそれからだ。

「汝、その存在は意思を持つ。」

ロッティが向かってくるのを交わしながら、私はくく真在唱くを紡ぐ。まだ教えられてさえないく真在唱く。けれども、私の真獣としての存在がそれを補ってくれる。

「地を駆け、木を愛し、恵みを受け、自由を謳歌する、それが汝。」

私が唱えるのは彼女を自由にするためのもの。

ロッティの動きが止まり、その身が震えだした。

「ゆえに我、汝の縛りを解き、これをくく真在唱・解縛くとする」

私が唱え終わると同時にロッティが倒れた。慌てて駆け寄る。

「ロッティ？」

様子を見るに、どうやら問題ないようだ。気を失っていると考え
るべきだろう。

私は近くの木の下に彼女を運んだ。

彼女が目覚めますまで、ここで待つことにしよう。

24話：私と縛り（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044o/>

黒い翼と碧の目

2011年1月15日17時32分発行